

厚木市におけるヤマセミの生態調査

——採餌と営巣の場所について——

神 保 健 次・神 保 忍・山 崎 良 子

Ecological Survey of the Japanese Pied Kingfisher in Atugi

Kenji JINBO, Shinobu JINBO and Ryoko YAMAZAKI

はじめに

筆者らは神奈川県厚木市でヤマセミ *Ceryle lugubris* の生態調査を続けている。本種は一般に四季にわたって領域を守り、一つの溪流一つの湖沼に一番ぐらいしか生息しない(清棲, 1978)。神奈川県においては丹沢や箱根などの山間の溪流に多い鳥で、カワセミが一時激減した時もさいわい農業などの影響を受けずに済んだ(中村, 1980)。この例は、その生息で良好なる自然環境が指標されていることの証ともいえる。

一方、観察を続けているヤマセミは、開発が進んでいる農村地帯の人為的環境の中に周年生息し繁殖している。筆者らはそこに注目すべきものがあると考え、当地域での本種の定着度を追求している。本報ではこれまでに観察することの出来た行動圏と巣穴について報告したい。

1. 調査場所および調査方法

調査地は神奈川県厚木市 玉川地区である(図1)。この場所は厚木市街から北西約5 kmで、丹沢山塊の主要峰の一つである大山(1245m)の東部山麓に位置し日向川、七沢川の下流域でもある。付近は住宅地等の増加で環境変化が著しい。

観察は1981年7月から1985年10まで行った。この間の観察総日数は132日であった。

ヤマセミを発見した場合、双眼鏡(8倍)と望遠鏡(20倍)で観察した。観察していた個体が移動した場合は、追跡によりその個体を発見し移動前と移動後のそれぞれの位置を2.5万分の1の地図上に記録した。

調査地で本種の巣穴(不完全なものも含む。)が発見された場合は、造巣されている崖の長さを巻尺で測定、その位置を2.5万分の1の地図上に示した。巣穴

の測定はヤマセミの非繁殖期と推定される10~12月の間に行った。

2. 調査結果

1) 餌場を中心とした行動範囲

調査の結果、玉川地区には一番のヤマセミが生息していることが明らかになった。このヤマセミには場所的に離れた7か所の採餌場所が観察された(図1)。ヤマセミは7か所ある採餌場の内4か所を繁殖期、3か所を非繁殖期に分け利用していた。つぎに観察された採餌場所について以下に述べる。

(1) 繁殖期の採餌場

ヤマセミの繁殖時期はこれまでの観察結果から判断し3月から9月頃までと推定される。この時期本種は玉川地区を流れる日向川、七沢川沿いに一定の場所を確保し、この場所で頻繁に魚を採餌するのが観察された。その場所は七沢川の下流に1か所、日向川の中流および下流でそれぞれ1か所、計3か所が観察された(神保ら, 1985)。3か所の採餌場は日向川、七沢川沿いの約2.5 kmの範囲であった。なお、ヤマセミがここで捕えていた魚種はオイカワとアブラハヤであることが観察された。

繁殖期にヤマセミが確保していたもうひとつの採餌場所は、神奈川県立自然保護センターが管理している池(面積, 1988m²)である(図1)。この池は休耕田であった所を1981年に整備して設置した場所である。水鳥の誘致をその目的の一つとしているため、池には餌用のフナ、モツゴ等の小魚が定期的に放されている。この場所でヤマセミが頻繁に観察されるようになったのは、1982年4月からであった。これまでの調査でヤマセミがここで魚を捕える期間は、3月~9月



図1 調査地とヤマセミの巣穴の分布

での約7ヶ月間であることが観察された。この間、池で本種が捕えていた主な魚種はフナであった。

(2) 非繁殖期の採餌場

ヤマセミの非繁殖期はこれまでの観察結果から判断し、10月から2月頃までと推定された。この期間、本種が利用していた採餌場は玉川地区に存在するニジマスの養魚場の池であった。その場所は日向川中流に1か所、七沢川中流に2か所、計3か所であった。いずれの養魚場の池でもニジマスを餌食する本種が頻繁に観察された。

ところで、本種がニジマスを捕えていたそれぞれの養魚場(図1)では、毎年10月～12月にかけ15～25cmに成長したニジマスの亜成魚を池に放している。

一方、ヤマセミがそれらの池で捕食していた魚の大きさは、約15～20cmで前述した期間に放されたニジマスの大きさと一致し、ヤマセミがその魚を採餌してい

ることが観察された。

3. ヤマセミの巣穴の分布

ヤマセミはカワセミと同様に土の崖に巣を掘り営巣する鳥である。玉川地区にはカワセミも周年生息し繁殖しており、2種の巣穴がある崖も発見された。西村(1979)によれば、カワセミとヤマセミの間で巣場所をめぐる競争が存在する可能性もあるというが、ここではヤマセミの巣穴についてだけ述べる。

さて、本種の巣穴の分布であるが、玉川地区において発見されたヤマセミの巣穴の数は7か所の崖に9巣(3巣は同じ崖に造巣)であった。図1に示すように9巣はいずれも日向川、七沢川沿いの崖に造巣されていた。これらは玉川地区に生息する同一番により造巣されたものであることが推察された。

つぎに、ヤマセミが崖に巣穴を掘る場合崖の大きさ



図2 巣穴(矢印)と魚を運ぶヤマセミ

がその造巢に関連するかを検討するため、巣穴が発見された崖全部の大きさを測定したところ、その値は崖の横幅10—30m (2), 30—50m (5), 50—70m (2) で崖の高さは3—5m (1), 5—10m (2), 20—30m (3), 30—40m (3) (カッコ内は例数) で、本種の巣穴はいずれも10m以上の横幅がある崖に観察された。また、崖の高さからヤマセミが示した造巢例では、3m以上の崖にその巣穴が観察されたのに対しそれ以下では観察されず、ヤマセミは高さ2m以上の崖に多く造巢するという西村(1979)の示す範囲とほぼ一致した。このことから判断し本種が造巢する崖の選択はその大きさに関係していることが推察された。一方、ヤマセミが造巢していた崖が自然崖か人工崖かを調べたところ、池あるいは川沿いに存在する自然の崖には1例も観察されなかった。巣穴が発見された崖はいずれも宅地造成等で出来たいわゆる「人工崖」であった。ヤマセミが造巢する崖の選択は、これまでの観察で崖自身の大きさに関係している可能性があることは先にも述べた。そこで、調査地域に存在する3m(高さ)以上の崖を探し本種の造巢に可能と考えられたものだけについて、自然崖か人工崖かに分けその数を比較してみた。その結果、前者が17例、後者で45例

と歴然とした差が示され、ヤマセミが造巢の対象とすると考えられた崖の存在数は、人工崖の方が多かった。

ところで、ヤマセミは川から1000m以上離れた崖もよく利用するという(西村, 1979)。そこで、ヤマセミの巣穴が存在していた崖の位置から、本種が繁殖期に示した採餌場(図1)までの最短距離を求めた。その結果、採餌場から500m以内に4巣、550m以上に5巣が観察された。このことはヤマセミは川から550m以遠の崖でも500m以内の崖でも同程度の造巢率を示すという西村(1979)の示す範囲と一致していた。

なお、採餌場から巣穴までの距離が最も近い例は約30m、これに対しその距離が最も遠方だったのは約1800mの例であった。

4. 巢の形態

ヤマセミの巣穴を測定したところ、その値は巣穴の入口は縦径11—14cm (5), 15—18cm (4), 横径12—15cm (2), 16—22cm (7), トンネルの長さは産室を含め130—169cm (6) (カッコ内は例数) であった。

なお、トンネルの深さが15—30cmと短いものが3例あり、これはその深さから推察し完成巣とは考えられ

なかった。

ま と め

動物がふつう生活している地域は、一般にその動物の行動圏と呼ばれている(山岸, 1976)。筆者らは、厚木市玉川地区に生息するヤマセミの行動圏を調査し、本報では行動圏の中の採餌と営巣場所について報告した。

既に論述したことで重複するものも多いが、これまでの観察結果からヤマセミの行動圏を検討してみたい。先にも述べてきたように、本種には魚を捕える一定した採餌する場所が7か所あった。7か所の採餌場は、繁殖期と非繁殖期で利用される場所が明確に区別され、ヤマセミはその時期に合せ、それぞれの採餌場を往復していることが観察された。このことは、ヤマセミの行動圏がその時期によって変化することを示す。つまり、近い採餌場を利用する繁殖期の行動範囲は小さく、これに比較し、その距離が離れる非繁殖期の行動範囲は大きくなることが考えられる。

ところで、本種の繁殖期の採餌場は日向川、七沢川などであったことは前述した。この期間ヤマセミはここで魚を捕え雛を育てる。このことは、本種の繁殖と生存に必要な量の魚がこの河川に生息していることを示し、餌とする魚の確保など、その条件さえ整えば、著しく都市化が進んだ地域を除きヤマセミの生息は可能であることを示した例といえよう。

一方、これに関連し、ヤマセミが造巣していた場所は、宅地造成等によって発生した土の崖での観察例が多い。このことは、崖に巣穴を掘って営巣するという生態的習性を持つ本種にとって、都市化の進行によっていわば副次的にもたらされた都合のよい崖がこの地域に多いことが示されている。

最後に、玉川地区の開発は今後も進み人工環境が拡

大することが予想される。今後さらに観察を続けて多くの資料を集積し、これを解析することにより、ヤマセミがその環境に示す動向を考察する必要がある。

謝 辞

本調査をすすめるにあたり、神奈川県立自然保護センターのみなさんには終始暖かい御指導をいただいた。厚木市立玉川小学校の職員、ならびに地元の方々にはいろいろな情報をいただいた。また、本稿執筆の機会を与えてくださった神奈川県立博物館の中村一恵専門学芸員に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 神保健次・山崎良子, 中嶋 忍 1983 ヤマセミの生態調査, どうぶつと動物園, 3: 12—14.
- 神保健次・神保 忍 1984 ヤマセミの巣立ち, どうぶつと動物園, 5: 12—14.
- 神保健次・神保 忍 1984 日向川下流域に生息するヤマセミの観察, 神奈川県立自然保護センター調査研究報告, 1: 15—19.
- 神保健次・神保 忍, 山崎良子 1985 日向川下流域に生息するヤマセミの観察(2), 神奈川県立自然保護センター調査研究報告, 2: 1—6.
- 川口孫治郎 1937 日本鳥類生態学資料, 巢林書房.
- 清棲幸保 1978 鳥類大図鑑, 講談社.
- 日本野鳥の会神奈川支部 1980 神奈川の野鳥, 有隣堂.
- 西村昌彦 1979 カワセミとヤマセミの造巣場所選択について, 山階鳥研報, 1: 39—48.
- 山岸 哲 1976 野鳥の生態と観察, 築地書館.
- (神保健次: 横浜市緑政局, 神保忍: 横浜市戸塚区亀井町30-14, 山崎良子: 東京都板橋区成増1-15-2)